
シンドローム

ノベノガタリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シンドローム

【Nコード】

N2915B

【作者名】

ノベノガタリ

【あらすじ】

『幽霊の声が聞こえる』事が特技と言えば特技な高校生、一日野周士。どこかのオレンジ髪の高校生みたいな霊能力ではないから、遭遇する怪異はいつも微妙な終わり方で…。そんな時、知り合った極寒美少女『青蓮寺蓮華』。彼女もまた、人には言えない秘密を持っている……。中途半端霊能力者の中途半端なライフストーリー。

『ファーストコンタクト』

青蓮寺蓮華ショウレンジレンゲの第一印象は、今でも僕の頭に焼き付いている。
あの女の事は、多分一生忘れる事ができない。

僕はこの体質柄、色々な『モノ』をひきつけやすい。

だから自然と、『その手』の知識を身に付けるようになった。

その日も、だから僕は市の図書館で調べものをしていた。

昼が終わり、夜が目覚める。

太陽と月が同じ空に存在する時間。

ねじれた時間。逢魔ヶ時。

斜めに鋭く差し込む陽光に、ああもうそんな時間なのか、と顔をあげた。

その先に、彼女はいた。

本棚の前で、所在無げに立ち尽くしている。

それは本当に『立ち尽くして』いて、彼女はそれ以外のことは本当にできないかのよう、ひたすらに立ち尽くしていた。

赤よりも紅い橙色が、その横顔を照らしていた。

遠目にもわかる、その大きな瞳が印象的だった。

真っ黒な髪と真っ黒なセーラー服。

真っ赤なタイは、橙にまぎれてわからない。

そんな彼女が、立ち尽くしていた。

まるで幽霊のようだ、と思った。

それほどまでにその姿は儚げで、でも確かにそこにいる、という存在感があった。

不思議な人だ、と感じた。

どれだけ眺めていただろう。

僕も時間という概念を忘却していたから、正確にはわからないけど、意外と短かったと思う。

それまで固まっていたのが嘘のように、彼女は歩き出した。
す、す——と。

音のないその動きは、どこか着ていないのに着物を連想させた。
それも、十二単みたいに床に引きずるくらいなの。

帰るのかな、と思ったらそうではなく、本棚の端まで移動すると、
そこから本の背表紙に指を這わせ、一冊一冊、確かめるように、舐
めるように、彼女は動き出した。

まるで指に眼があるかのように。

見えない糸を引くみたいに。

蜘蛛を連想させるその指の動きに、一瞬だけどきりとする。
あくまで無表情なその姿が、逆に美しさを引き立てていた。

眼を——離す事ができない。

眼を——外す事ができない。

まるで巢にかかった獲物の様に、僕は彼女に囚われていた。
す、と指の動きが止まる。

辺りをゆっくり見回して、ふと、僕を視界に入れる。

本来なら、すぐに眼を逸らすのだけれど、僕の身体は言う事を聞い
てくれなかった。

僕を視界に入れた彼女は、でも僕を見てはいない。

ぼんやりと、ただ眺めただけだった。

そして再び、する、す——、と彼女は蜘蛛に戻る。

僕は変わらず、それを眺め続けていた。

そうして、しばらく——。

蜘蛛は満足したのか、また音のない静かな動きで本棚を後にした。

彼女が居なくなった後、好奇心から本棚を調べてみた。

彼女が見ていた本棚のジャンルは、僕と同じ、『民間伝承』だった。

「……ん、」

ふと、泣き声が聞こえた気がして、僕はその足を止めた。

その足、というのは通学路のアスファルトを踏む僕の足。
別段遅刻するような時間帯では無く、だから余裕をもって辺りを見
回した。

服、食品、調度品——ここは僕の町の商店街だった。

まだ朝、それも通学の時間帯。

商店はこれからが準備、目覚めの時だ。

だから開いている店は無かった。

僕と同じ学生がちらほら。

駅へ向かう社会人がちらほら。

そんな場所。

「気のせい、かな」

ぼんやりと呟いて、でも動かない。

ゆっくりと左眼だけを、閉じる。

そして、集中する。

左耳に、集中する。

「ううううう……えっ……」

今度ははっきりと聞こえた。

気のせいでは、なかった。

6・7歳くらいだろうか。

少女の泣き声。

集中する。

左耳に集中する。

音から視覚を、音を立体に起こす。

少女の場所は、僕から斜め左、15mほど先。

ゆっくりと歩いて、近づく。

少女の目の前に立ち、声をかける。

「僕の声が、聞こえるかな」

「いぐ……ひつく……、お、お兄ちゃん、だれ？」

声が返ってくる。

か細い声。

「僕？僕は一日野周士イチガヤシユウジって言うんだ。近所に住んでるただの高校生だよ」

ゆっくりと、噛み含めるように言う。

膝に手をつき、眼線を下げる。

「どうして、泣いているの？」

「……っ、ま、ママに、ママと、は、はぐれちゃった、の……」

しゃくりあげながら、たどたどしく、言う。

その言葉が持つ意味に、僕は密かに眉をひそめた。

無論、少女には悟らせない。

「はぐれちゃったのか……」

「……、だ、誰に言っても誰も返事してくれなくて、こ、声を聞い
てくれなくて、寂しくて、怖くて、こ、怖い、こわいよう……、怖
い、」

あー。

ままあー。

そこまで言って、また彼女は泣き始めてしまった。

僕は彼女が気付かないようにさりげなく、アスファルトの上に足で
印を擦り付けた。

靴に残った砂でぼんやりと、刻んだ模様と文字が浮かぶ。

「泣いちゃ駄目だよ、君。泣くことはないんだよ」

できるだけ優しく、柔らかく少女に言う。

暖かく、声をかける。

「名前を、教えてくれるかな」

「つく、い……煌木キラメキきらら……、だ、よ」

「きららちゃん、か」

キララちゃん……みたいな。

眩しい名前だ。

両親も、きっとそう思ったのだろう。

輝きを失わない子供。

そう願いをかけて名付けたんだろう。

「良い名前だね」

「…っ、っく」

泣きはピークを過ぎたようで、声音はだいぶ落ち着いてきた。

「きららちゃんは何年生？」

「…っ、しょうがく、3年生…」

へえ。

思ったより大きいな。

「お友達は何人？」

「…え、と、たくさん…」

「たくさんいるのか、羨ましいなあ」

ちなみに僕は2人。

——、少ねえ…。

「好きな食べ物は何？」

「ま、ママの作ったハンバーグ…」

「へえ、お料理上手なんだ？」

「う、ん…」

声が多少明るくなる。

ちなみに、僕の得意料理は松前漬け。

美味いんだよね、あれ。

「外で遊ぶのは好き？」

「す、好き」

「何して遊ぶのが好き？」

「か、影ふみ鬼…」

ほう。

影ふみ鬼か。

懐かしいなあ、影ふみ鬼。

ちなみに僕はどっちかっていうと色鬼の方が好き。

あと凍り鬼。

「楽しいよね、あれ」

「う、ん…、楽しいよ。お、お兄ちゃんもこ、今度やる？」

「良いなあ、それ。やろうかな」

最後に鬼ごっこしたのいつだろう。

なんだか物凄く昔の事みたいな気がする。

「好きなTVとかはある？」

「え…と、ピタゴラススイッチ、とか…」

「あー…確かに。あれは面白いね」

僕もあれは好きだ。

今でも視ている。

一回、あの終わりとかに出てくるからくり仕掛けを真似してみようとして、大失敗して部屋の窓を割った事があるのだけどそれはまた別の話。

「じゃあ、一番楽しいときはどんな時？」

「…、…ま」

「うん」

きららちゃんが、何かを堪えるのがわかる。

ぴん、と張り詰めていて、今にも切れてしまいそうな、こちらなのかあちらなのか、曖昧で微妙で危うい感覚。

「ママと、一緒に居るとき」

足元の印が、変質するのを感じる。

——この子は、まだ大丈夫だ。

「きららちゃん」

「な、なあに、お兄ちゃん」

素直な声。

君はまだ、大丈夫だよ。

「ママに、あいたい？」

「…あいたいよ…！」

涙を堪える様な、痛みを堪えるような、そんな声。

切ない声音。辛い音。

もう少しの、我慢。

「ついておいで」

付いておいで。

憑いて、おいで。

「ママに、逢わせてあげる」

廻り逢わせて、あげる。

「…、！本当！？」

子供らしい弾んだ声で、少女は言った。

だから僕は、笑顔に向ける。

最大級の笑顔。

多分、うぶな女子校生がこれを見たらそれだけで恋に落ちてしまい
そうなくらい素敵な笑顔。

「本当。だから、一緒に行こう。ママはそんなに遠くにいないよ、
すぐに逢える」

「…っ！うん！」

きららちゃんは、そう明るく言い放つ。そして「あ、あ、でも…」

「どうしたの？」

「…、マ、ママ、が……」

僕は何も言わない。

彼女の言葉を、待つ。

「知らない人に、ついて行っちゃ駄目だ、って…」

……うん。

それは正しい。

最近は何物だし、そういう教育を受けていないほうが稀だろう。

「そうだね。僕もそう思うよ」

「…、ど、どうしよう……。ね、ねえ、周士おにちゃん、私、ど
うすれば良い…？」

かわいそうなくらい、声が震えている。

不安なのだろう、きつと。

心の底から。

「簡単だよ…。きららちゃんが自分であいに行けば良いの」

「え、で、でも…」

「大丈夫」

きららちゃんの言葉を遮って、僕は続けた。
笑みは、絶やさない。

足元の印が、存在感を増していく。
光っているように見えるのは、多分気のせい。
でも。

場が――、できあがる。

「思い出して――きららちゃん。ママは、どこにいたっけ？ママの声は、どこから聞こえてくる？」

「ママ、の…」

「そう、ママの声。いつもきららちゃんを呼ぶ声。『ごはんだよ』って言うってくれる声。」

『大好きよ』って言うてくれる声。『お帰りなさい』『いつてらっしゃい』って言うてくれる声。叱られる時の怖い声、一緒に本を呼んで笑う声、『おやすみ』、『おはよう』、
『ありがとう』、色んな声、【ママの声】。……さあ、きららちゃん。そろそろ、ママの所にかえる時間だよ」

帰る時間。

還る、時間。

「ママの、ところ…」

「そうだよ、ママの所。あったかい、場所」
「ママの…こえ…」

気配が変わる。

足元の印は、最早砂でできた朧気な模様ではなく、確固たる『結印』
となって存在している。

きららちゃんの気配も変わる。

なんとなく、上を向いたような気がした。

だからつられて、僕も上を見た。

良い空だった。

綺麗に青くて、白い雲ははらりと散っていた。

太陽はまだ、しっかりと見えないけど。
良い日になるだろうな、と確信した。

「…ママの声が…聞こえる…」

「うん、聞こえるね」

上を向いたまま、僕は応える。

きっと、きららちゃんもそうだろう。

「きららちゃんのこと、呼んでるよ」

「……うん」

ふわり、と。

場の空気が軽くなるのを感じる。

鎖が解ける、音を聞いたのは気のせいかも知れない。

「かえら、なきゃ」

ママの所に。

「そうだね。ちょっと寄り道しすぎたから……早く行って、ママを
安心させてあげなよ」

「うん」

密閉されていた時間が奔流の様に動き出す。

彼女の時が、動き出す。

彼女の気配が、薄くなる。

「ママが、いた……。な、なんで気付かなかったんだろ」

「何でだろうね……。でも、見つかった良かったじゃない」

もう、僕の目の前に気配は無い。

彼女の姿を見る事ができない僕は、だからもう彼女がどの辺りに居
るかよくわからない。

でも、きっと彼女の眼には見えているだろう。

優しい母親の姿が、見えているはずだ。

暖かい、場所が。

「じゃあね、きららちゃん。またいつか、あおうね」

いつか、また。

また、逢おう。

「うん…。周士おにいちゃん」

「ん？」

「ありがとう」

その言葉を最後に。

彼女の気配は完全に掻き消えた。

後には、力を失ってただの落書きと化した印と、からからと心地良く流れる風だけがあった。

……………、

なんともいえない気分。

「なれないなあ、こればかりは」

そしてふと、周りを見れば。

「……………」

何か可哀想なものをみる眼で、通行人がちらちらと僕を見ながら歩いていた。

……、えっと。

確かにまあ、これはこれでしょうがないんだけど。

ここはもうさっさと学校に行ってしまうべきだと思ったので、学ランを整え、歩き出すことにした。

その少し後ろに。

真っ黒なセーラー服に真っ黒な髪で、

大きな真っ黒い瞳に真っ赤なタイが目立つ。

そんな女子校生がいた事に、僕は全然気付いていなかった。

後々になって考えれば、どう考えてもあそこで気付いていたら、きっと僕は彼女と関わりを持たなかっただろうし、彼女は彼女でまた別の道をたどったんだろう。

その事を思い出しては、僕は1割の後悔と。

9割の自分の運の良さを感じるのだった。

『ファーストコンタクト・2』

「はぁ、んで」

「んで、つて…それだけだよ」
昼。

高校。

そして屋上だった。

春近く、最近は気温も暖かい。

空は、——やっぱ良い日だった。

「ふーん……」

ブリックのヨーグルトを、ストローでずごくごくごく、とすすりながら
アクトカワジョウ
それいつ……芥代^{アクトカワジョウ}は興味なさそうに呟いた。

何を言われるかはわかっていたので、脱いだ学ランを枕にして、早々に昼寝と洒落込んだ。

昼休み。

男二人で屋上パン食い。

……。

……………。

せつねえー……………！！

「しかしねえ」

きゅぽ、という音と共にストローから口を離し、仗は呟いた。

眼鏡の奥の瞳は、相変わらず底知れない。

ちなみに、今はすっごい眠そう。

「声を聞いただけで能力を使って成仏までさせるなんて……」
やれやれ、といった感じに首を振りながら呟く。

「君は本当にロリコンなんだねえ」

「違えだろそこは！！」

そこは『お人よしなんだねえ』とかそういう台詞が続くだろう！
何だよ、人助けしてロリコン呼ばわりされる僕って！！

「あれ、違うの？」

「意外そうに言うな!!」

あまりの発言に飛び起きてしまった……。疲れる…………。

「でもさ、発言だけ聞いてたらそうだよ。『お嬢ちゃん今いくつ?』だの、『好きなものは何?』だの」

「…………」

「極めつけはほら、あれだよ。『ママにあいたい?…………グフフ、じゃあおじちゃんについておいで』」

「そこまで変態チックな言動じゃ無かっただろ!!」

しかも僕はおじちゃんじゃねぇ!!

そんな完璧『誘拐犯』じゃねぇか!!

ガチ変質者じゃん!

「そっか…………ロリコンじゃ無かったのか…………」

「そうだよ…………わかってくれたか」

うん、と仗は頷いて、

「シスコンだったんだね」

「何でそうなるんだ!!」

リアルにやめろ!

幸い僕に妹はいないから良いようなもの…………!!

「ねえ周士君、僕には小学4年生の妹がいるのだけど」

「腫れ物扱うみたいな眼で見えるな!!心配しなくてもめえの妹にはこれっぽっちも興味はねぇよ!!」

「そうかい?それなら良いけれど」

それだけ言って、仗はふつりと黙った。

こいつ…………僕の事を本当に変質者かなんかだと勘違いしてる節があるからな。

まあ、第一印象が悪すぎた事は認めるけど。

「でもねえ周士君」

「んだよ」

眼鏡の奥の眠そうな、底無し沼みたいな眼が僕を見据える。

「わかってるよね」

「……………」

「わかって、いるよね？」

底無し沼が、言う。

「見えない隣人である彼らに、どうやら僕らは関わる術をもって生まれた……。だけどそれはあくまで『それだけ』の話で、深く関わる事は絶対にいけない」

「……ああ」

わかってる。

わかって、いるさ。

それがまだわからなくて、弁えていなくて。

この17年間、酷いめにあってきたのだから。

「別に君の心配をしているわけじゃないけれど……。『彼ら』に関わりすぎるのは良くない。何故ならそれは『彼ら』の活性化を意味するからだ。本来『在るだけ』の存在だけれど、『観測者』の存在が『在るだけ』の彼らに『存在理由』を与える。理由無くいるだけだった連中が、名前と力を持つようになる——そうなってくると、君だけの問題じゃなくなる。この町に住んでいる『交渉人』の一人として、それは注意して欲しいことだよ」

「わかってるよ」

それは——嫌と言うほど。

それが原因で僕は。

大事なものをたくさん、落としてしまったのだから。

「わかってる、わかってます。……………今日の事だって、本来ならあんまり良い事じゃないこともわかってる」

わかってるけど。

わかつちやいるけど。

泣いている子供を無視して捨て置けるほど、僕は大人じゃないだけの話だ。

聞こえないなら無視すれば良い。

敢えて聞こうとする必要はどこにも無い。

けれど、聞こえるなら。

そして、助けを求めているなら。

「動いてしまうんだよね、君は」

やれやれ、といった調子で仗は首を振った。

癖なんだろうな、首振るの。

「君みたいなのが何で『聖母の耳』を持ったんだか……本当、神様
つてのは残酷だよ」

「……信じて無いくせに何ぬかす」

「はは、確かに」

そう言っただけは横になる。

僕も、横になった。

横に寝ている男……芥代仗。

普通の家に育ったごく普通の人間。

自分の事を、『交渉人』と言った。

僕は、こいつに——、

命を救ってもらったのだ。

同学年にして、クラスメイト。

出席番号1番で、僕は2番。

芥代、仗。

『交渉人』。

「しかし、周士君」

「何だよ」

「君が遭遇する連中は何でみんな女性なんだろうな」
……………

なんだろう。

確かに、今日の事もそうだし、今までなんとかああいう事はあった
けれど……。

「意外と女難の相なのかもね、周士君」

「お前のその手の発言は大当たりしそうで怖いんだよ…」

しかも、相手は全員実体無しだし。

あっても全然嬉くねえ相だな。

「きつと、近いうち、現実にも女難がくると思うけどなあ……」

ぼんやりと、仗は言った。

「なんだよそれ、預言か？」

僕は冗談めかして相槌をうつ。

「んーん……勘、だよ」

ふああ、と欠伸をしながら仗は言った。

「安心してよ、僕の勘はだいたい外れるから」

「それは自慢できることではないがな」

まあ男の勘は当たらない、って言うしな。

別に心配はしじゃない。

当たっても当たらなくても、結局起こる出来事は——変えられないのだから。

帰り道。

学校で行う全ての業務を終えて、僕は帰路についていた。

時間は午後4時。

今日も図書館に行くつもりだった。

この『図書館通い』は、日課という程では無いにしろ僕の生活に馴染んでいる。

帰宅部だけれど、気分的には読書愛好会だ。

読むのは『伝承・歴史』ただけだ。

「んー」

ゆっくり傾く日光を眺めながら、図書館に向けてぶらぶらと歩く。

歩きながら、昨日の女子校生の事を思い出した。

真っ黒。

真っ黒女子校生。

大きな眼が忘れられない。

「今日もいんのかね……？何であんなのが図書館に居るんだか」
あんな、場違いな。

あれほどに、場が違うものが。

まあ、考えてもしようがないけどな…。

僕には関係の無い話だ。

だいたいあの高校の制服も見たこと無いし……。

まさか中学生って事はないだろうが。

そんな事をうらうらと考えながら、道を曲がる。

人通りの少ない……というより、人が通らない道。

住宅街の隙間のような場所。

人が居るはずなのにいない、この妙な空気が好きで、僕はここをよく通っていた。

いた、のだけれど。

「——！」

背後から突然衝撃を感じ、僕は思わず足をとめた。

僕の両脇から、腕が生えている。

セーラー服だろうか、何かの制服に包まれた腕。

これは……、

後ろから、抱きしめられている、のか？

その手が次の瞬間、わきわきっと動いたかと思うと、僕の胸をそれぞれ掴むかのように伸びた。

学ランの下を通り、カッターシャツ越しに指の感触。

「——、ちょ」

「動かないで」

密やかな声。

女の声だ。

無感動な声。

首もとに、息がかかるのを感じる。

同時に、背中に柔らかな感触が二つ。

……。

………。

あれ？

何か、今僕幸せ？

「あの」

「喋ることも許しません。余計な事を言うともぎっ……、という感触。

「がっ………！」

「呼吸器に一生、障害が残るわよ」

……。

前言撤回。

一日野周士、人生で最大のピンチ。

「わかったかしら」

「…、わ、わかった……」

「そう。ものわかりが良いのは良いことだわ」

そう言いつつも、僕の肋骨と肋骨の間に差し込まれた指の強さは変わらない。

息を吸うたびに、肺がきりきりと悲鳴を上げる。

振り払うことも、できない。

どっかで見た事ある……、これ多分軍隊かなんかの捕虜捕獲法だ。図書館で暇つぶしに読んだ本が、まさかこんな時に役に立つとは。

………、あれ？

役に立ってない気がする。

「単刀直入に言います」

女が喋るたびに、首筋に吐息がかかる。

多分、僕の身体を支点にしているからだろう、背中の柔らかい「このへん」と「そのへん」はさっきから僕の背面神経を徹底的に刺激している。

……。

男って……。

生命的危機にあっても、そういう事考えられるんだ……。何かショック。

「あなたの耳を——よこしなさい」

「……………!!」

今——こいつ、何と言った？

僕の——耳？

僕の耳をよこせ？

「いや……………違うわね。力を貸しなさい」

「……………」

「私には貴方の力が必要なのよ」

……………。

男としては非常に言われて嬉しい台詞だけど。

この状況じゃ無ければなあ。

「何とか言ったらどうなの？」

めり、とまた嫌な感触。

冷静になってみたら、この感触、マジで痛い。

多分、この女その気になったら本当に僕の肺腑を貫くことができるだろう。

何なんだろう、最近の女ってこんなに怖いんだろうか。

「…いや、しゃべるなって言われたし」

かろうじてそう応えようと、女は

「ああ、そんなこと言ったかしらね」

と応えた。

……………。

なんか、マジでやばいぞこの女。

「で、どうなの？力を貸すの、貸さないの？」

「ど、どうなの、って」

「まあもつとも」

みりみりみり、と。

胸郭の膜が悲鳴をあげるのがわかる。

洒落にならないくらい、痛い。

「貴方に選択権は無いけれど…」

「……………っ!!」

「悲鳴を上げないのね。男らしいじゃない」
まずい。

とりあえず、この女にまともな会話が成立するとは思えない。
まずはこの状況を何とかしないと…。

「わ、わかった…! わかったから!!」

「わかった? 何がわかったのかしら」
相変わらずの調子で女が言う。

指の力は相変わらず…どころか、着実に圧力を増している。
あ…、何か痛いの通り越して熱くなってきた。
やばいやばいやばい。

「か、貸せてんなら…、貸すから! 僕の力を貸してやる、だから」

「約束よ」

そう言って、女はするり——、と。

僕からあっけなく剥がれた。

「がは……………っ」

ずぼり、と。

胸から音が聞こえた気がした。

思わず膝をがくりと落とす。

うわ、めっちゃくちゃ空気が美味い。

こんな都会で森林浴の気分が味わえるなんて!!

「ってそんな場合じゃねえ…!」

すぐさま振り返って、距離をとる。

僕の背後の、気配無き女——。

いったい何者、と見てみれば。

「——は?」

真っ黒なセーラー服に、真っ黒な眼。

真っ黒な髪が、真っ赤なタイに映えている。

ソックスから革靴まで真っ黒。

肩口に、白いラインが二本入っている。

「約束したわよ。貴方は私に協力する」

女は——女子高生は無表情に言った。

真っ黒くて大きな瞳が、僕を射抜く。

仄かに暮れかかった陽の光を浴びたその姿は、

「お前——図書館の」

蜘蛛女だった。

女子高生はしばらくそのまま固まっていたが、すぐにす、す——とあの動き方で僕の前に立ち、言った。

ショウレンジンゲ
「青蓮寺蓮華」

「——は？」

間抜けにも、さっきと同じリアクションで返してしまった。

んー、非常事態とは言え、冷静さを失ってはいけないな。

今後の課題だ。

「お前じゃないわ。青蓮寺蓮華よ」

無感動に、僕を見下ろして言い放った。

「よろしく、声が聞こえる貴方」

——ああ、なるほど。

多分、だけれど。

今日の朝のやりとり、見てやがったな。

目的が何かは知らないが、それで僕に声をかけたのか。

畜生、仗の言うとおりでじゃねえか…。

踏み込むとろくなことが無い。

……あ、加えて女難の相ってこれ？

もしかして、これ!?

難すぎる……!!

そして大当たりじゃねえかお前の勘!!

「貴方、じゃない」

ゆっくりと立ち上がる。

驚いたことに、胸の痛みは消えている。

相当綺麗に技をかけられていたらしい……末恐ろしい女子高生だ。

「……じゃあ、何かしら」

僕はしっかりと相手の眼を見て、言った。

イチギャッシュウジ

「一日野周士だ」

「そう。よろしく、一日野君」

普通の相手だったら、すぐさま逃げ出していたけど。

図書館のあの姿が、眼に焼きついて離れない。

少なからず——、一日野周士は、青蓮寺蓮華に興味があった。
だから。

「よろしく、青蓮寺」

僕らはこうして、知り合った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2915b/>

シンдрローム

2010年10月10日22時42分発行